第6群発表

6～1　母子同室入院における看護婦の役割

南病棟8階第一　○高橋礼子　田中　弓削　米村　吉田　今井　大塚
池田　　戸　辻川　鶴野　小斉　大野　遠山
丸山　中野

はじめに

小児看護の対象は、小児と母親および家族であり、その目的は「小児が正しい成長発達を遂げ、健康な人間形成へと進むことを助け疾患を持った小児に適切なケアを行い、健康な生活への復帰を助ける」ことである。

小児の入院は、本人はもちろんのこと、家族にとっても大きなショックを与えるものである。殊に母と子の関係においては、母子分離不安からくる弊害が問題になり、その様な弊害をなくすために「母子同室制」がとられ母親の小児看護参加という形が行なわれる様になった。当病棟でも「母子同室制」を取り入れており、その実際を述べると、

①母子分離が困難な乳幼児で、原則として年齢6才未満で、付添い者は母親とする。

②疾病、病状により個室隔離を要する児、となっているが、以上の様な場合でも、同室者の母親に不都合な状況が起きて、母子同室入院が不可能になった時には、状況により分離入院に努めている。

母子同室入院の性格上、躾や生活面で母親の手にゆだねる部分も多く、母親の負担は精神的にも、経済的にも、また慣れない生活環境という面でも問題は多い。

ここに私たちは、母子同室入院の長所を生かし、看護面でのリーダーシップを看護婦がいかにとっていくかという点に注目し、母親よりアンケートをとり研究を進めていったので、ここにその経過、並びに結果を報告する。

アンケート調査方法

1. 研究期間
昭和57年10月、11月の2カ月間
2. 対　　象
母子同室制をとっている乳、幼児室の母親と個室の母親。（疾患、入院形式は限定しない）計42名
回収率　　85％
3. 研究内容
1)母親が感じる母子同室制の問題点、看護婦に求めることを知るために退院時アンケート調査を行なう。
2)アンケート調査の結果により現在の当病棟における母子同室制の問題点を知り、今後の母親指導に生かせるよう考察する。

アンケートの実際

1. アンケート項目
(1)母子同室制をとっていて、児と一緒にいて困ったことは何か。
(2)母子同室制をとっていて、児と一緒にいて良かったことは何か。
(3)実際に生活していて感じることは何か。
1)病室について
2)付き添い者の生活上のことについて
3)面会及び病棟内の規則について
4)経済面の問題
5)家族の他の兄弟や父親に及ぼす影響
(4)看護婦や医師に望むことは何か。
(5)保育面、看護面その他看護婦から参考になったことは何か。
(6)母子同室制について下記より選び理由を上げて下さい。
1)従来通りが良い。
2)全面的に看護婦にまかせる。
3)昼間のみ付添う。
2. アンケート内容並びに結果
(1)母子同室制をとっていて、児と一緒にいて困ったことは何か。
①持続点滴が気になり良眠できなかった。　47％
②子供の躾の面において甘えを必要以上に認めてしまう。　36％
③大部室では、同室の母親に対しての気がねが大きな精神的負担であった。　34％
(2)母子同室制をとっていて、児と一緒にいて良かったことは何か。
①子供の持つ、入院生活や検査、処置に対する不安を緩和できた。　33％
②子供の状態を常に見ているので疾病に対して理解

でき、治療や症状についてもその場で医師、看護婦に質問できた。 33％

③教育、躾面において母親が直接行なえる。（母親の満足が得られる。） 7％

④予後不良の子供を持つ親にとっては、子供と一心同体でいられ、慰めとなる。 5％

(3)実際に生活にしていて感じることは何か。

1)病室について

①大部屋の母親に対するスペースが狭すぎる。 43％

③子供がいつでも自由に使用できる娯楽室がほしい。 23％

2)付添い者の生活上のことについて

①食事、入浴等母親に対しての生活上の設備がない。 76％

②環境の変化、行動範囲の抑制によりストレスがたまった。 38％

3)面会及び病棟内の規則について

①面会時間の15時から18時を19時までに。（勤め帰りの父親が、間に合わない。） 56％

②子供が寝ている時には、付き添い者もベットを広げて寝たい。 36％

4)経済面の問題

①付添い用のベット、布団が簡素な割に料金が高い。 30％

5)他の兄弟や父親に及ぼす影響

①父親にとっては家事、他の子供の世話などで仕事が増えて大変だった。 38％

②他の兄弟に寂しい思いをさせた。 46％

③近くの親戚に他の兄弟を預けられたので問題なかった。 3％

(4)看護婦、医師に望むことは何か。

①看護婦は子供たちにはやさしいが、母親に対しての心遣いが足りない。

②夜間ドアの開閉を静かにして欲しい。 33％

③検査オリエンテーション時には検査の説明をもっとわかりやすくして欲しい。 12％

④検査及び処置を行う場合、母親も同席したい。 21％

(5)保育面、看護面その他看護婦から参考になったことは何か。

①子供にとっての遊びの大切さ及び様々な遊び方を教わった。

②保清、授乳の効果的な方法について、アドバイスを受けた。

(6)母子同室制について下記より選び理由を上げて下さい。

1)従来通りが良い。 83％

理由

①子供の変化は母親が一番わかる。

②子供のそばにいてやりたい。

③子供の精神上、母親と離れるのはよくない。

2)全面的に看護婦にまかせる。 0％

理由

①看護婦は多くの子供をみているので自分の子供が急変した時、すぐに気づいてもらえないのではないか。

3)昼間のみ付添う 18％

理由

①看護婦にも早く慣れるのではないだろうか。

考　察

アンケートに寄せられた回答を見ると、付添いの母親からは、まず病室や生活の場に於ける不満が多く出されたが、これらは病棟の構造上の問題もあり、早急には解決できないことである。しかし子供の為のプレイルームは、小児科に於ける「遊び」の重要性を思うと、今でも必要性を感じるし、母親の休養室があれば、少しは母親のストレス解消になるのかもしれない。しかしこれらは、新病院に期待するところが大きい。

ここで最も注目しなくてはならないことは前述の「母親のストレス」であり、これは母子同室制での最も大きな問題点の1つと言えるのではないだろうか。アンケート中に、「看護婦は子供に対してはやさしいが、母親に対しての心遣いが足りない」と言った内容のものがあった。これは、母子同室制を取っている現状で、母子双方に目を向けていくということで大事なことだと思う。母親たちは子供の日常的な事に加え、病気のこと、検査のこと、大部屋での周囲への気がね、持続点滴のこと、他の兄弟及び家族のこと等入院が長くなるにつけて、そういった精神的、肉体的ストレスが募っていく様である。それは、アンケート前にも漠然と理解できてはいたがアンケートを通して、スタッフ全員が一様に認識できたと思う。その中で、「ミルクを時間通り持っていってあげること」「夜間のドアの開閉は静かに行なうこと」等の事柄は十分反省し実行していかなければならない。

検査や処置についてアンケート中に母親が同室したいといった意見があったが、小児の場合は数人で抑制しなければならないこともあり、それがかえって母親に動揺を与えるのではないだろうか。だが、時には母親が手を

握っていれば子供の恐怖心が和らぐこともあるかも知れない。今は母親の同席という形はとっていないが、今後検討してみていい問題とも言える。現状では検査及び処置の説明を母親の理解力を考慮しながら、なるべくわかりやすく説明して不安の除去に努めていくことが大事である。そして子供の訴えと共に、母親の訴えにも耳を傾け、母親とのコミュニケーションを円滑に保つことが必要であり、それぞれの母子に応じたアプローチが出来れば、治療及び看護、生活両面での看護婦のリーダーシップが発揮され、相互の信頼関係も成り立つだろう。それが看護婦一人一人の今後の課題と言えるのではないだろうか。

また、看護婦のリーダーシップ確立のなかで常に忘れてはならない問題として、母子同室入院による利点と欠点があげられる。

利点

①母子の１対１の関係により、成長発達を助け、ホスピタリズムの弊害が防止できる。

②自宅での躾や教育方針が継続できる。

③入院中の母親指導により患児の病状の理解、家庭の看護の知識を深めることができる。

欠点

①母親の精神的・肉体的な負担が大きい。

②残された家族（父親・兄弟等）への影響が大切である。

③看護面で母親がそばにいるという安心感から、ややもすると母親まかせになりがちである。

④母親のもつ問題の解決、母親間のトラブルの調整など、管理面での業務が煩雑となる。

以上の項目に留意し、利点を生かし、欠点をカバーする看護こそ、母親参加の看護のなかで果たしていく役割であろうと考える。

おわりに

看護婦がリーダーシップを発揮していくための方向性として以下のことに気をくばり、より良い看護の実践に努めていきたい。

①患児と共に母親へも目を向け、母親のニードの把握に努める。

②母親の持つ問題点を明確にし、個々に合った解決方法を考える。

③医療、看護に関して常に専門的知識を深め、必要な時に必要な指導、看護ができるよう努力する。

第６群発表

６～２　母子分離が患児に及ぼす影響について

南病棟８階第２　○井沢和代　増崎　石井（富）　工藤　浦野　河西
藤間　佐藤　石井（真）　上杉　斉藤　小川　上村
御園

Ⅰ　はじめに

乳幼児期においては、日増しに成長発達を遂げている大切な時期である。その発達のため、保護者の援助はもちろんの事、種々の環境からの刺激が必要である事は、衆知のとうりである。

その各自の特性にあった、個人的な援助を必要とする時期に、外科的疾患を持ち、児の長期入院をしいられる事は、少なくない。環境の変化に伴い、手術、処置、母子分離など児の成長発達段階に与える影響は、大きいものと考える。

特に母子分離が及ぼす影響は、絶叫、食欲の減退、拒食、退行現象、浅い眠り等、種々の情緒反応をひきおこし、ひいては将来の人格形成においても、何らかの障害があるものと、我々は考える。

そこで当病院棟の入院患児において、母子分離が及ぼす影響に目を向け、患児の行動の変化の追跡調査、母親の意見調査等の、実態調査から、入院時の情緒反応を分析し、母子分離が及ぼす問題点について、検討したのでここに報告する。

Ⅱ　研究方法

1.　昭和５７年６月から１０月末までの、入院患児を対象として、専用のノートをもうけ、入院第１日目から、約１週間、児の母子分離における、精神的、身体的な反応を観察し、記録した。またそれを継続してゆけるように申しおくった。

2.　上記と同期間、入院患児の保護者に対し、入院時に別紙（表２－ａ）の様な、アンケート用紙を配布し、